中国医科大学での指導および講演、報告書
（2010 年 6 月 24－27 日）

慶應義塾大学医学部
外科学教室（呼吸器）
教授　野守　裕明

２０１０年６月２４日、瀋陽空港に１２時半着。中国医科大学の田教授とそのスタッフに出迎えられ、ホテルに向かいチェックインをすませた。その後、すぐに中国医科大学付属第四病院に向かい、李教授、前中国医科大学学長の出迎えを受け、教授室で中国医科大学と日本の交流について説明を受けた。その後、スタッフと共に病院内の胸部外科病棟と放射線治療部の設備見学をした。放射線治療部には最新の機器が入っており、現京都大学と同じ方法で定位照射を行っている説明を受けた。放射線治療の教授は、京都大学での放射線治療部に留学して、その機器および治療計画を取り入れていると言うことであった。

コンピューター画像で見る限り、日本国内における定位照射と同じであり、治療技術の高いことがわかった。胸部外科病棟では患者を回診したが、手術後の経過はどの患者も良く、術後も平均４日間で退院であるので、ベッド回転率は日本と同様であった。夕食は第４付属病院の胸部外科スタッフ、李教授、病院長を含めた会食となった。

６月２５日は、朝９時半に第四付属病院の胸部外科に再度行き、病棟回診の後に、手術後の患者および手術前の患者のレントゲン写真を見ながら、スタッフ全員と症例検討を行った。手術方法は概ね日本と同じであるが、進行肺癌に対する治療方法および診断方法が若干異なっており、その差について討論した。

日本では術前のリンパ節転移診断は国際的にはトップであることは定評があるが、そのリンパ節転移診断方法のひとつに超音波内視鏡の方法がまだ中国では行われていないので、その手技と機器を紹介した。中国医科大学としてはその手技を是非とも取り入れたいと言うことであったので、私が帰国後、日本のオリンパス社に言って、少なくとも早急に超音波内視鏡の説明 DVD を送るように指示することを約束した。

６月２６日の午後は１時間の講演および３０分の討論が行われた。聴衆は胸部外科のスタッフ全員（十数名）に加えて、胸部外科を現在研修している学生合わせて５０名ほどであり、活気があった。私の講演内容は「早期肺癌および局所進行肺癌における外科治療の現状」であった。中国にはまだ早期肺癌の症例がそれほど多くないが、局所進行肺癌の症例は多いので、その治療に対する質問が多く出された。放射線治療の量、同時使用する抗癌剤の量、を中心に質問および討論がなされた。

ちょうど同じ日に日本の神奈川県立がんセンターの呼吸器外科部長の中山医師もいらしていたので、私の講演後に引き続き「日本の肺がん外科治療の現状」について講演がなされ、両者の講演と討論が４時間ほどの間で行われた。夕食は第四付属病院の胸部外科スタッフに招かれた会食となった。

６月２６日は夕方、中国医科大学の国際交流処・副所長である潘伯臣教授より感謝状を渡され、潘教授、第四付属病院の胸部外科スタッフと共に会食となった。会食中に潘教授より中国医科大学の国際交流および国内研修について説明がなされた。

６月２７日、昼に瀋陽空港から成田に立った。

以上

（2010 年 6 月 28 日）